

第7回府中市生涯学習審議会会議録

1 日 時 令和2年10月30日（金）午前10時～12時

2 場 所 府中駅北第2庁舎3階 会議室

3 出席者（敬称略）

(1) 委員12名

大谷久知委員、木内直美委員、佐野洋委員、田頭隆徳委員、立石朝美委員、津田仁委員、友田照子委員、中村洋子委員、長畑誠委員、藤井孝弘委員、渡邊和子委員、渡辺たき子

※岩久保早苗委員、乙津俊博委員、福田豊委員欠席

(2) 職員5名

二村文化生涯学習課長、楠本文化生涯学習課長補佐、柏木生涯学習係長、諫山事務職員、山本事務職員

4 報告事項

(1) 配布資料の確認

ア 資料1 第6回府中市生涯学習審議会会議録（案）

イ 資料2 令和3年度関東甲信越静社会教育研究大会東京大会
第6回実行委員会資料（抜粋）

ウ 資料3 令和2年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会
第4ブロック研修会資料

エ 資料4 令和2年度府中市生涯学習審議会スケジュールについて

オ 資料5 府中市福祉計画（案）抜粋

カ 資料6 生涯学習サポートと地域の担い手（ファシリテーター）について
のイメージ（第2次府中市生涯学習推進計画掲載）

キ 資料7 生涯学習ファシリテーター・サポーター養成講座の修了者数の
推移について

(2) 前回議事録の確認

各委員に校正を依頼した前回議事録（案）について、市民に公開することが了承された。

(3) 令和3年度関東甲信越静社会教育研究大会東京大会 第6回実行委員会について

事務局： 資料2は、令和2年10月20日（火）に青梅市の「ネットたまぐーセンター」にて開催された「令和3年度関

東甲信越静社会教育研究大会東京大会第6回実行委員会資料（抜粋）」となっている。

会長： この資料は、我々が今後考えていかなければならない来年度の11月に府中市で開催される「関東甲信越静社会教育研究大会東京大会」についてのものである。左側は、通常開催のスケジュールとなっている。そして右側は、新型コロナウイルスが収束しない場合の腹案となっている。通常開催の方は期間が2日間となっており、1日目は全体会を中心に夜には情報交換会が行われ、2日目の午前中に分科会を行って終了という流れになっている。1日目の最初のアトラクションの部分は「元気一番!! ふちゅう体操」に決定した。伝統芸能ということで太鼓など候補があったが、このような状況であるため、より柔軟に対応できることや、会場の方たちにも参加してもらえんことを考慮した。腹案については3つの案があったが、実行委員会で話し合った結果、腹案①に決定した。内容としては、分科会を行わず、ブロック研修会として毎年やっているものを同じ内容で分科会ごとにそれぞれのブロックでやるというものである。どのようにやるかは今後検討していくということになった。また、新型コロナウイルスの影響で会場に来ることができない人が出てくると予想される。腹案では録画の後日配信や配布となっているが、ライブで同時配信をするのはどうかと提案し、その方向でも事務局には検討してもらうこととなった。ただ、実際に行うには技術や知識、費用が掛かるため、いかにして府中市の人材を活用し実現に向けていくかを今後検討していく必要がある。そして、施設のキャンセル料がかかってしまう関係で直前での中止の決定ではなく、4月の時点で、先を見通してどのような形で開催するのかを決めなくてはならない。これらの事については府中市が来年度の会場市ということもあるため、皆さんの力を借りながら進めていきたい。

(4) 令和2年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会 第3回役員会・拡大役員会について

事務局： 資料3は、令和2年10月23日（金）に西東京市のイングビルにて開催された「令和2年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会 第4ブロック研修会資料（抜粋）」となっている。第4ブロックは、府中市の所属して

いるブロックとは異なるが、府中市は今年度の都市社連協の副会長市となっているため、都市社連協からの役員派遣という形で長畑会長にご出席いただいた。

会長： 毎年ブロックごとに社会教育委員が集会を行うもので、府中市はご存知のように第5ブロックとなっている。第5ブロックは近隣の調布市、狛江市、三鷹市、武蔵野市、小金井市で形成しているが第4ブロックは北の部分になっており、西東京市、清瀬市、小平市、東久留米市、東村山市が1つのブロックを形成している。事務局からも話があったが、府中市は今年度の都市社連協の副会長市ということで挨拶に行ってきたということである。このような状況下では、グループディスカッションもできないだろうということなので講演のみとなり、作新学院大学の先生に講演を行っていただいた。この時は、学校との連携、社会教育と学校教育の連携という話が主になっていた。どちらかというところ、学校教育においていかに地域とつながっていけるかという視点が多かった。西東京市の事例と作新学院大学は栃木県にあることから、那須烏山市の事例を紹介していただいた。聞きながら思った点としては、社会教育は、社会教育あるいは生涯学習という視点で常に活動をしているし、その枠の中では当然学校教育ともつながっている。ただ、学校教育とつながるとなると市役所では縦割りになってしまい、全く別の話になってしまう。例えば、社会福祉の部門についても同じように社会教育と関わっており、学ばなくてはならないことが多いが、どうしても社会福祉の方になってしまう、自治会についても市役所の中では別団体になってしまうといった縦割りがあるが「地域」というようにくくったら全部同じである。学校を拠点にして地域でどうしていこうかと考えたときには、社会教育の人や社会福祉の人が関わってくるという形で本当は全部が関わってくるのだが、縦割りがされているため難しいということをどのように乗り越えていくのかが今後の課題なのではないかと感じた。

5 審議事項

(1) 第3次府中市生涯学習推進計画の具体化に向けて

会長： まず、資料の説明を事務局からしていただく。

事務局： 資料4、5、6、7について、簡単にご説明させていた

だく。まず、資料4について、こちらは、「令和2年度府中市生涯学習審議会 スケジュール」となっている。今年度は全8回開催予定としており、今回は第3回目となる。本日の議論の進め方については、のちほど長畑会長からご説明をいただく。次に、資料5は、「府中市福祉計画(案)」の抜粋となっている。前回の審議会で「市民のニーズや課題の把握が必要」との意見があり、他の課で実施している調査の資料で該当するものがあれば、配布させていただくとお伝えした。こちらは、令和3年度から8年度を計画期間とする「府中市福祉計画(案)」の抜粋となっている。府中市福祉計画を策定するにあたり、地域福祉推進課が昨年10月と11月に実施した調査となっており、地域に根付いて活動している団体の方々から、地域課題と地域解決のためにできることを把握する目的で実施され、民生委員・児童委員、自治会・町会等、シニアクラブ、ふれあいいきいきサロン運営者、コミュニティ協議会、わがまち支えあい協議会、地域福祉コーディネーターを対象に、文化センター11圏域で行ったものである。次に、資料6は、第2次府中市生涯学習推進計画に掲載しているもので、「生涯学習サポートと地域の担い手(ファシリテーター)についてのイメージ」となっている。次に、資料7は、生涯学習ファシリテーター・サポーター養成講座の修了者数について、まとめた資料となっている。

会長： 今後の進め方についてであるが、今年度は2年任期の2年目となるため、答申を作成し、それを提出することになる。それと並行して、先ほどもお話した「関東甲信越静社会教育研究大会東京大会」の準備の話も入ってくるかと思う。今回と次回については、テーマを絞って自由な議論をしていくながら我々の中での共通理解を作っていきたい。それを受けて、できれば年内に答申案を作成し、それを基にさらに議論をしていくというのを12月から1月にかけてやっていきたい。やっていくうちに新しい論点が出てきたら書き直しになるため、それを見越したうえでそのような予定で進めていけたらと思う。前回の審議会で、地域課題や困りごとに焦点を当てるとというのが今回の大きな流れとなっている。もちろん習い事や趣味というものについて「学び返し」や社会教育をしていくこともとても大事なものであるが、今回はそれらだけではなくて暮らしの中での課題が増えてきた中で、「自助・共

助・公助」の中の「共助」の部分を見ると、我々が自らの課題を抱えて動き出す必要があるというのがおそらく共通の認識になってきているかと思う。それについて社会教育、生涯学習は何ができるのかを考えていきたいというのが大きな前提としてあり、そこに府中市の「学び返し」を位置づけていこうというようになっていた。具体的にどのような課題があって、その課題に対してどのような講座が必要かという個々の提案をするのが審議会の役割というわけではなく、もう少し大きな仕組みや在り方を議論して答申していくことになるかと思う。そのため、前回のブレインストーミングも実際にどんな課題があるのかを共通認識として確認しようということを出していただいた。その際にアンケートを取るという話も出たが、それは今回の我々の枠組みの中では難しいため、すでにあるものを参考にしたらいいのではないかということになり、今回、皆さんに資料5「府中市福祉計画(案)抜粋」を配布している。それを見ても、地域の課題ということで、全ての地域から挙げられた課題と複数の地域から挙げられた課題がある。ブレインストーミングで挙げられた課題と比較してみるとかなり重なっている印象を受けた。つまり、資料5に書いてあることは市民が感じていることをある程度網羅しているのではないかと思う。次にそこから課題を解決するために出来る事についても書いてあるが、全ての地域から出た意見では「交流・居場所づくり」、「情報共有の仕組みづくり」というのが出ていた。複数の地域から出た意見としては「担い手の確保・育成」が出ており、まさに社会教育、生涯学習のなかの「学び返し」の部分にあたるのではないか。そして、「交流・居場所づくり」や「情報共有の仕組みづくり」はまさに生涯学習のなかでやれることであり、やってきていることである。そのため、この部分が大きな課題になるのではないかと考える。課題というのは様々であり、1人1人が抱えている課題もおそらく複数ある。たとえば、子どもがいる家庭であれば子育て・教育はもちろん、住んでいる地域の防災・防犯についても気になってしまう。さらに、2世帯で暮らしているのならば介護の問題も出てくる。このように様々な問題が1人の中に混在している。市役所から見ると、それぞれの課題を別々に解決していこうということになっていると思うが、実際には、これらの課題を全部

あわせて1つの地域の課題になっているはずである。そこで必要になってくるのが「場」の存在である。ひとつの「場」ができると、課題を持った人たちがこの「場」の中で話ができる。例えば、学校教育の抱える課題を解決しようとする、今までは学校教育の枠組みの中で解決できたかもしれないが、今はそうはいかないので地域の力を使って社会教育と結びつけて解決しようというようになっていく。福祉の課題も同様に、福祉の専門家だけで話し合っ解決できるかというところはいかないので、地域の人たちと一緒に解決していくということになってきている。つまり、それぞれ別々に解決できるならいいが、現在はそれが難しくなってきた。では、別々なものをつなげるためにはどうしたらいいか。そしてもう1つの話としては、抱えている課題がバラバラのように見えて実は共通した課題抱えているというように、課題ごとにいろんな人が関わってきているため、個々に動くよりは、共通の課題がある人たちが集まり、会話の中から解決に向けての何かを生み出せるような「場」が必要である。府中市の方から特定の課題について何かあるかという話があることもあるが、まずはこのような「場」でやりたいことを出し合っ共通認識を作るといったのが必要なのではないか。それが、まさに資料5の中の居場所・交流づくり、情報共有の仕組みづくりという部分になる。なので、ここでいう「場」というのは居場所であり、交流の場であり、情報共有の場であるかもしれない。そういった場所を作っていくと、そこで人が集まって話すことで何か生まれてくるということがある。逆に、自分で抱えている課題をいくら自分で考えても解決はできない。お互いに話すことによって兆しが見えてきたりもするものである。課題というのはみんなで話しながらいろいろな案が出てきて動き出すものである。つまり、地域の困りごとがあっ、それに対して社会教育、生涯学習として学び、その学んだことを次につなげるためには、こんな課題があっこんな風にしたいという1人1人の気持ちが合わさっ解決に向けて動き出すきっかけが無いといけないのではないか。具体的にこの「場」とは何なのかというところ、府中市の場合、主にそれぞれの文化センターになる。府中市生涯学習センターや市民活動センタープラッツも重要な役割を担っているが、地域により近いものとして

はそれぞれの文化センターになる。文化センターの中にこのような居場所や情報交換の場を作り、人が集まって話し合ったり、文化センターの方から地域の課題について話し合う場を設けたりして「学び返し」を前提とした講座組み、文化センターごとにやっていくということも可能かもしれない。今お話しした、住民が自ら集まって課題解決に向けて話し合うというボトムアップ的な考えと、文化センター側が人を集めて話し合ってもらおうというトップダウン的な考え方が合わさって地域課題に根ざした講座が生まれて実際に行われ、その後に「学び返し」に繋がっていくというのが1番理想的な流れではあるが、実現可能性は低いという課題がある。

委員： 福祉計画の資料ということで書かれているが、社会福祉協議会ではそれに非常に近いことをすでにやっている。

「わがまち支えあい協議会」が、会長の話の中の「場」にあたるものである。「ふれあいいきいきサロン」は地域の方たちの居場所としてお茶をしたり、何か小さなものを作ったりしているところである。「わがまち支えあい協議会」は立ち上げることを社会福祉協議会がサポートし、現在では、7か所の文化センターで立ち上がっている。「わがまち支えあい協議会」は、社会福祉コーディネーター、民生委員、自治会役員や自治会の人、交番、サロン主催者、NPO、協議会参加希望の市民、場所や案件によっては、商店会や企業の方などからなり、地域の課題を持ち寄って、解決に取り組んでいる。解決方法の中には①30分100円という高齢者独居対象の定額有償ボランティア（電球交換、買い物、雑草抜き、お風呂電話、ゴミ出しなど）、②フードバンク、③子ども食堂、④見回り、声掛け、⑤地域子どもイベント等の「しくみ」に展開され解決を試みている。しかし、やっているところが社会福祉協議会であるため、仕組みとしては近いものであるが、福祉という分野の中で完結してしまっているというのが現状である。また、傾聴講座、遺言と後見人制度、認知症サポーター講座など、参加者が社会福祉協議会のボランティアに結びつくような講座を設定してもいる。

会長： 福祉分野では今話があったようなことを行っていて、学校教育分野であればスクールコミュニティ協議会が同じようなことを行っている。このように、縦割りの体制になっているため、市民も自身が関心のある分野にしか参加し

ないという形になっている。だからこそ、社会教育、生涯学習としてはより幅広い人たちに声をかけることができるのではないか。縦割りの体制になってしまっているところで全体をうまくつなげることができるような、他の人にもいろいろ広げることができるようなものがあればいいのではないか。そこで、府中市が以前より行っている生涯学習ファシリテーター、サポーターの人たちが活躍できるようにしていくことを考えても良いのではないか。その活躍というのがまさに地域の課題、困りごとをうまく拾い上げ、すでにあるような講座についてもっといろんな人に参加してもらえるようにするなど、縦割りにになっているものをうまく横に繋げる役割を生涯学習ファシリテーター・サポーターが担えないかということを考えてみたい。本日の議題としてはこれらの事を前提として、これがあつたらいいなということとすでに動き出している分野はあるがどうしても参加者が限られてしまっているのも、それをより大きく広げていく、あるいは今まで全く出てなかった課題が出てくるかもしれないのでそれを拾い上げていくことで生涯学習ファシリテーター・サポーターを起点として活用できないかということ議論していきたい。

委員： 会長のご提案されたアプローチの仕方はまさに理想的なものであるが、それをいざ実践に移すとなると非常に難しいのではないか。私はアプローチの仕方が少し違う。まず「学び返し」ということが十分市民に周知がされておらず、ほとんどの人がその言葉の意味するところがわからないという状況になっている。そのため「学び返し」という言葉の認知度が低くかつその中身の受け取り方が混乱しているように感じる。そこでまず「学び返し」の理念や目的などを説明したパンフレットを作成し、それを見た人に「学び返し」について十分理解してもらおう。次に、現行の講座の中で「学び返し講座」とそうでないものを仕分け、「学び返し講座」を割り出す。その後、教養講座など個人の生きがいに関する講座と個人や地域の問題を解決するような講座に分ける。今までの学び返し講座は教養講座に関するものが多くそれらもちろん大切なもので今後も継続すべきであるが、我々がこれから目指していこうとしているものは個人や地域の課題解決に向けた講座を実施することである。こうした取り組みを行うことにより、府中市独自の「学び返し」という理念を発展させていくこと

になるのではないか。そう考えると、現在すでに行われている教養講座的な「学び返し講座」というのは、私が考えるに第1ステージにあたり、より個人や地域に密着した問題解決に向けた講座は第2ステージに移るということになると思う。第2ステージになると、今までは講座のタイトルと講座名を決定し、講師を決めれば済んでいたが、第2ステージにおける講座を実施するとなると、企画、立案、実施に至るまでしっかりとした対応が必要となり時間がかかる。そのためには、実施に先立って「学び返し講座」の実行委員会を作るのがいいのではないか。その実行委員会は、文化センター、府中市生涯学習センター、市民活動センタープラッツ、職員、その中に生涯学習ファシリテーターを加える。最初は講座立ち上げに詳しい専門家のアドバイスを受けながら、その実行委員会の中でまず講座を作り、そこで「学び返し講座」の管理運営をしっかりと行うといった体制を作る。そのうえで、企画段階で一番重要となる問題や課題を選別するにあたり、対象となる団体などに直接アンケートやヒアリングを行い、その中の重要なものから講座にしていく。講座の実施にあたっては、講座に関わる課題に直接関係する人たちを講座の運営の中に組み入れ、協働して実施するといった体制をとる。実行委員会を立ち上げるにあたっては、組織の在り方や予算の手当など課題はあるが、現体制の中で実施するにあたってはこのようなアプローチの方が実現性は高いのではないかと考える。

会長： おそらく考えていることとしては、整理するということころまでは同じで、その先の、ファシリテーターを含めた実行委員会を作り、そこで実際にどんな課題があるかを話しながら講座をいくつか作っていくということをやれば横でつながっていけるということである。

委員： どちらにしても話が大きいのではないかと。初めて「学び返し」という言葉を聞いたときはとてもいい言葉だと感じた。東日本大震災があり、みんなが自分の出来る事から始めようという形で、大震災以前よりもボランティアの意識は高まっている。「学び返し」をどう捉えるかの問題だと思うが、人より自分がちょっとできることをちょっとできない人に教えていくというような形で実践している人はおそらくとても多いのに、府中市として「学び返し」を定義してしまうと自分がやっていることは「学び返し」では

ないのかと思う人が出てきてしまう。言葉自体をアピールするのは良い事だと思うが、わざわざ「学び返し」を定義する必要はないのではないか。また、生涯学習ファシリテーターを活用するというのは賛成だが、生涯学習ファシリテーターが活躍するための支援や、仕組みを考えることも必要である。例えば、1つの文化センターをモデルケースとしてそこで小さくやってみるといったのもいいかもしれない。さらに、文化センターに関してだが、基本的に文化センターは自由に出入りすることはできない。使っている団体は事前登録制で登録していない人は利用できないというようになっており、例えば講座を催したいと企画しても、予約なしで会場に来るということができない。そのような文化センターの在り方も変えていかないとこれらの事を実現するのは難しい。文化センターの利用の事前登録制についての現状を教えてください。

事務局： 現在の文化センターの使い方について説明をさせていただく。文化センターは複合施設となっており、公民館、高齢者福祉館、お子さんが利用している児童館になっている。例えば公民館であれば、社会教育関係団体に登録をしてメンバーも決まっている団体に利用していただいている。また、それぞれに福祉団体や青少年団体があり、基本的には、登録をしたうえで、公共施設予約システムで施設予約をして団体の会員が利用している形になっている。自由に文化センターに来て、活動している団体に参加するというような利用の仕方はできず、もし見学や体験を希望するならば事前に団体に申し込む形になっている。また、地域包括支援センターで、文化センターを利用して何か活動をするというのも、基本的には誰が来るかは事前に把握している必要がある。

会長： ということは、先ほど話に出ていた「ふれあいいいききサロン」なども誰が来るかはわかっている状態ということか

事務局： その開催されているサロンだけを目的に来る。それが予約制かそうではないかというのはそれぞれの福祉の関係の人がいると思うが、基本的にはその人に相談をしに来るというようになっている。

会長： 可能性として、いつでもは難しいが、この時間帯であれば誰でも来てあるテーマについて話して良いというようなことはできるのか。

- 委員： 例えば登録をして自分が講座を企画して実施する際に地域の人は誰でも来て良いというのはできないはずである。
- 委員： お茶飲み会などのサロンを企画し、登録して部屋を作れば誰がいつの時間でも来ることができるというのはできるのではないか。
- 委員： それもできないはずである。文化センターには、講演会であっても、事前の申込みや、来る人を明確にするというのがあるはずで、不特定多数の講演会は府中市生涯学習センターで行うというのがあったのだが、それはもう変更されているのか。そこが変更されていないと今まで話に出ていた「場」を作ることができないのではないか。
- 委員： 文化センターと市民活動センタープラッツの大きく異なる点としては、フリースペースが無い事である。そのため、気軽に立ち寄って本を読むといったことができない。そのため市民活動センタープラッツのような動きができない。
- 会長： 時間を設定して、この場所に来てくださいというのがまずはあって、人も限定していることがあるかもしれない。
- 委員： 基本的には事前登録制であると思う。
- 事務局： 補足させていただくと、文化センターの高齢者福祉館については地域の高齢者の方は利用して良いということになっている。ただ、使い方にもよるため、今話題に出ている公民館の会議室は事前登録制になっている。高齢者福祉館の平日の昼間の時間については高齢者の方が自由に来て話し合いをしたりと、自由な空間になっている。現在は新型コロナウイルスの関係でどこまで自由なのかについて把握はできていない。
- 委員： 文化センター条例などはあるのか
- 事務局： 「府中市文化センター管理規則」というものがあり、その中で運営についての事が定められている。
- 委員： 文化センターの中に公民館があつて公民館条例があり、高齢者福祉館ではまた別に条例があり、児童館ではまた別のものがそれぞれあるため、我々が言っている文化センターというのはどこの部分を言っているのかが曖昧になってしまっている。
- 会長： 今回は生涯学習審議会ということで、1番手を付けやすいのは文化センター全体というよりは公民館部分である。来る人がわかっていなければいけないということと、時間を設定しなければいけないという課題がある。先ほど話に出ていた現在すでに行われている地域課題解決につながる

る講座を仕分けるといのは、行う必要があるように感じる。そして、その先のファシリテーターを含めた実行委員会を組織し、「学び返し実践講座」を行うということに関して具体的にどうしていくかについては、意見があったように「学び返し実践講座」と名付けてしまうと、「学び返し」が定義づけされてしまい、今まで活動してきた人がないがしろにされてしまうという弊害が生まれてしまうのではないかということであった。それとは別に出てきているのが、生涯学習ファシリテーターが活躍できる仕組みとして、1つの文化センターをモデルケースにした方がいいのではないかというものであった。また、現在の文化センターの制限をどうしていくかというのが今までの話の流れだと思う。

委員： まずやってみることが重要である。実現可能なのは何かということ的前提を考えなければ、理想論だけではこの先の進展が望めないのではないか。私の案としては、問題や課題を洗い出すときは、それらの問題や課題を直接抱えている人を中心に考えることになると思う。例えば、子育てについての課題を考えるということであれば、まず、子育て中の市民に向けたアンケートやヒアリングを行い市役所の関係部署の意見なども取り入れながら講座を作り上げ、その講座を中心に課題を抱えている人たちが自主的に集まり、そこで自分の体験などを語り合いながら参加者がお互いに学び合うといったような形に持っていくと1つのモデルが出来上がるのではないか。府中市生涯学習センターではこれまでに様々な講座を行っているので、その蓄積とノウハウを十分に生かし、センター内に実行委員会の事務局を置き、そこで講座案を練り、実施していくことにすれば実現はそれほど困難ではないと考える。

会長： 府中市全体での実行委員は、府中市生涯学習センターに置き、実際に行うのは1つの文化センター圏域をモデルとして実行に移すということも可能なのか。

委員： 課題に応じてその課題が解決しやすい場所でやる。場合によっては文化センターであるかもしれないし、府中市生涯学習センターであるかもしれない。つまり、その課題に一番適した場所で講座を行うのを想定している。

委員： 特に社会福祉協議会では、すでに講座を行っているが、それを生涯学習と接点を持つことによって、講座自体をより「大きなもの」にする役割を生涯学習が担うという考え

方もあるかと思う。例えば、成年後見人や認知症についての講座があるが、社会福祉協議会だけでは日程や規模が限られてしまうが、生涯学習と接点を持つことによって、より掘り下げた内容にすることができる。社会福祉協議会のような他組織と協力して講座を「格上げする」のも有効なのではないか。

会長： 今のお話は、実行委員の中に社会教育福祉協議会の人にも入ってもらい、既存の講座を大きくして府中市生涯学習センターで実施するというようなことでよろしいか。

委員： 男女共同参画センターフューエルで行われているような子育てに関する課題について深くやろうという時に、単発のものではなくて府中市生涯学習センターで引き受けることによって、より深い学習ができるということである。

会長： お互いにやっていることはたくさんあるけれども、バラバラだったり、規模が小さくて参加者が集まらないといったことを考えることでより大きく、様々な人が参加できるものになっていくのではないか。もしかしたらより地域に根ざしたものになるかもしれない、といった話が生まれる「場」がこの実行委員会というイメージだと思う。

委員： 実行委員会を組織するというのはこれらの事を前進させるためにも必要なことだと思う。その際にすでにやっている学び返しを整理して、忘れられてしまっているものを、もう一度どういったものが「学び返し」なのか分かりやすく趣味や生きがいも含めながら現在実施されているものを例として整理しておいてから実行委員会の立ち上げが良いのではないか。また、子育ての話があったが、子育て中の母親たちは悩みが多いということであろうか、母親たちが独自に集まっているのをよく見かけた。「子育てひろば」といったところに赴き情報交換をしているのもその一つではないかと思う。そういった所に集まってくる悩みを抱えた母親たちに対しての講演会に結び付けるなど、身近な課題を拾いだしていけば何か具体的なものが見えてくると思うので、実行委員会ですらに前進していければいいと思う。

会長： 小さな活動というのはすでにあるので、そういった所も生涯学習として支援をしていけたら良いのではということであったと思う。

委員： やれそうなことからやっていくというのは賛成である。新型コロナウイルスはもう完全になくなるということは

おそらくないので、その場合、今までであればできていたことが、新型コロナウイルスの事を考慮するとできなくなる。自由に使えるようにという話があったが現在では、各施設でも利用の際は使用する人の名簿作成や検温、消毒をやっている。いろんなこと、新しいことをやっていきたいという気持ちはあるが、現状を踏まえて今何ができそうかということも併せて考えていけたらいいのではないか。

会長： 新型コロナウイルスのことは答申の中でも避けては通れないものであるため、検討していかなければならない。

委員： 新型コロナウイルスの事を考えると、自分も様々なことが制限されてしまっている。この生涯学習審議会では新型コロナウイルスも考慮したうえで何か小さなことでもいから前に進むようなことをしたい。それには「ファシリテーター」といった言葉自体がわかりにくいと感じる。そのため、より具体的な分かりやすい言葉作りから入った方がより親しみを持つことができるのではないか。

会長： 新型コロナウイルスに対してより具体的で、前向きな提案を出していきたいと思う。またファシリテーターという言葉については、市民がより馴染みやすいものにしていくのも課題の1つになるかもしれない。

委員： 生涯学習の事業は、市民協働事業の1つとして位置づけられていると思う。協働推進課に問い合わせたところ、市民協働事業として事業を実施すると、何割かの補助が出るといった話があった。市民協働事業の一環として、協働推進課の協力を得ながら講座を実施するというのも一つの方法ではないか。

会長： 今までの皆さんの話を整理させていただくと、「学び返し」をより深めていき、地域課題の解決につながるようなものにするためには、どうすれば良いかということ議論してきた。すでに、様々な形で実践例や実際に課題の解決につながっているものもあるし、ボランティア活動をやっている人もいる。それらをしっかりと押さえる。つまり、どんな活動を実際にやっているのかを把握する必要がある。本日出た提案では、実行委員会のようなものを組織し、各関係施設、関係課のほかにファシリテーターも加わって「学び返し実践講座」について話し合うというのが良いのではないかということだった。そうした中で、1つの文化センターをモデルにした形で具体的な課題に対して、その課題に直接関わっている人とともにその人たちが中心になっ

て1つの場所でモデルとして作っていくのはどうかという話になっているかと思う。それと平行して、文化センターがまだ自由に人が集える場になっていないので、今後の地域課題の解決のための拠点としていくことを考えると、そこも改善していく必要があるのではという意見もあった。後は、新型コロナウイルスに対してのより具体的で前向きな提言ができれば良いという話もあった。

副会長： 実現にあたっては、各課題の所で正確に抑えていく必要があるように感じた。

会長： 次回は、本日出た意見をまとめたものを事前に皆さんに配布し、それを基に具体的な全体の仕組みとそれを実際に実現するためには何が必要かということについて議論していきたい。

委員： ファシリテーターを活躍できるようにということで様々な意見があったが、具体的にどういった人たちのことを想定しているのかについて聞きたい

会長： 府中市は大学と連携し生涯学習ファシリテーター・サポーター養成講座を行っており、市内を中心に講師を発掘し、講座を開催することで地域の「学びたい人」と「教えたいたい人」をつなぐ役割（「創りたい人」）を担う。ファシリテーターが市民とセンターの架け橋になるという位置づけをしている。これは府中市生涯学習センターを拠点にしてという考え方のため、そこから変えていく必要があるかもしれない。そして、つなぐ役割とあるが、今後はそこにつなぐだけではなくて地域課題の解決につながるようなといったことも加えていかなければならない。サポーターは生涯学習の講師になれる人を紹介する制度であると言える。資料7は修了者数の推移となっているが、人数としては、そこまで多くはないのが現状である。

委員： しっかりと講座を受講し修了した人がファシリテーターとして活動しているということか

会長： その通りである。そのため、現在議論しているファシリテーターがより活躍できる仕組みづくりというのはこの方々をターゲットとしている。ただ、講座は今後も実施していく予定のため、人数は増えていく。もしこの場で生涯学習ファシリテーターの位置づけを明確にできれば、それに合わせた形でファシリテーター養成講座を作っていく必要がある。ファシリテーターは年齢的には、若い世代が少ないのも課題になっている。

委員： 文化センターのコミュニティ協議会に所属し年間14ほど事業を実施している。例えば1つの事業を実施するにあたってどのようなものにするかと検討を行うときは、できるだけ地域住民を中心とした出し物などをやってもらっている。楽しくその場を盛り上げ、その事業が地域のために、そして地域住民にとって憩いや交流の場となるように心がけており、自分自身も楽しくやっている。

会長： 講座を運営していた立場からすると、「学び返し」ということに格別にそこまで焦点を当てたことはなかったことと、地域課題の解決に向けたという範囲までは踏み込んでいなかったということがある。より広い範囲で生涯学習を盛り立てる人を養成していきたい。次回の審議会は、論点のたたき台のようなものを作成し、もちろん他の論点についても意見などがあればどんどん発言して欲しいが、基本的にはそれに基づいて進めていきたい。そして最後に、府中市生涯学習センター宿泊施設について、事務局から報告をお願いします。

事務局： 市の公共施設マネジメントの動向についてお話しさせていただく。府中市では、公共施設マネジメントにより宿泊機能・サービスの今後の在り方について専門家会議が設置され、平成31年3月に、宿泊施設については見直す報告での検討結果をまとめた報告書が市へ提出された。今後、市全体として宿泊施設の在り方を検討していく必要が出てくると考えているため、ご承知おきいただきたい。

会長： 具体的に宿泊施設というのはどこがあるのか

事務局： 府中市では、府中市生涯学習センターの4階部分もあるが、そのほかにも、市民保養所の「やちほ」と、こちらは学校施設になるが八ヶ岳府中山荘という3つの公共施設として府中市が持っている。時代の変化により、市が保養所などの宿泊施設を持つ必要があるのかという話になっているため、今後皆さんにもご議論いただく可能性があるため、前もって委員の皆さんに報告をさせていただいた。

7 その他

(1) 次回の開催について

出席委員の都合を挙手にて確認し、事前に確認した欠席委員の都合と調整し、11月27日（金）午後4時半～6時半で開催することが決定した。